

巻頭言

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）の歩みとこれから

岡 陽子\*

Achievements and Prospects of Graduate School of Teacher Education of Saga University

Yoko OKA\*

学校教育学研究科は2016年4月にスタートし、今年度で5年目を迎えた。3期生までが修了し、修了生61名（うち現職院生30名）全員が佐賀県を中心に小中高の教師や指導主事、管理職等として活躍している。5年一区切りと考えると、本研究科の歩みを振り返り、エビデンスに基づき次代を見据えた改革が必要な時期を迎えたといえよう。

今年度8月の入試説明会の折に、一人の学部生から「大学院では現職の先生と一緒に学ぶことができる」と聞いたのですが、そのような授業はあるのでしょうか。」との質問があった。その言葉から現職院生と共に学べる環境への大きな期待が伝わってきた。確かに本研究科の現職院生とストレート・マスター（以下ストマス）は互いのよさを認め、相互に学びあう姿勢をもつ。経験豊かな現職院生が、「教職を目指すストマスの疑問や考え方に新鮮な驚きと発見がある」と語ってくれる。院開設後5年目という短期間のうちに醸成されつつあるこの雰囲気は本研究科の強みである。現職院生もストマスも研究においては同じスタート台に立っていることを知っていることが嬉しい。

「理論と実践の往還」を原理として、本研究科の基盤となるカリキュラム構築の中心となったのが、今期をもってご退職される佐長健司先生である。佐長先生が中心となって作成された約140頁にわたる設置申請書は記憶に新しい。その分厚い申請書に佐長先生の熱い思いを感じたことを懐かしく思い出す。記して感謝の意を表したい。授業実践探究コース、子ども支援探究コース、教育経営探究コースの3コースの設置とともに、佐賀県教育委員会との強力な連携のもと、県内三か所（鳥

栖市、武雄市、唐津市）にサテライトを設置し、学校現場と構造上の接点を構築された。ここでは大学院の授業の一部が実施され、地域で奮闘する先生と大学院生が共に学び合う場が生まれた。

通年科目「探究実習」（5単位×2か年）においては、年を経るごとに県・市町教育委員会、関連施設や小中高の理解が深まり、積極的な協力が得られるようになった。例えば、A高校では、複数教諭の協力により、ストマス考案の単元指導計画に基づき学年全クラスで同じ授業を展開し、検証・考察がしやすい環境を整えてくれるなどの事例も見られるようになった。

本研究科紀要においては、2017年3月第1巻に研究論文10編、第2巻は15編、第3巻14編、そして2020年第4巻19編であり、院生の論文投稿も徐々に増え、緩やかに歩を進めている。特に、2021年第5巻には、今後の改善の素材を得るための効果検証プロジェクトを実施し、「佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）第3期修了生追跡調査結果の概要」と題して報告書を掲載している。ご覧いただければ幸いである。

この一年間は新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下の一斉休校やリモート授業の開始、GIGAスクール構想の推進など、教育界も揺れに揺れた。このような時こそ創造力と柔軟性、協働性を発揮し、危機の上に新たな学校文化を創り出すことのできる修了生を送り出した。果たしてその機能を持ち得ているのか。改めて本研究科の意義を厳しく問い、強みを生かした新たな改革に向かう必要がある。

（2021年1月29日 受理）

\*佐賀大学大学院学校教育学研究科